【土木計画学研究・論文集　Vol.24 no.2　2007年10月】

嵯峨野の名所再興にみる景観資産の創造と継承に関する研究
-祇王寺、落柿舎、厭離庵の再興事例を通して-
Creation and Succession of the Landscape Asset through Reconstruction of Meisho in Sagano

山口敬太*・出村嘉史**・川崎雅史***・樋口忠彦****
By Keita YAMAGUCHI*・Yoshifumi DEMURA**・Masashi KAWASAKI***・Tadahiko HIGUCHI****

１．はじめに

（１）研究の背景・目的

近年、町並みや名勝・庭園にとどまらず、信仰や宗教、文学、芸術活動に深い関連のある景観などの、地域固有の歴史・自然・生活様式などに裏付けられた景観が、地域の景観資産として認められるようになるなど、景観資産と捉えられる対象が急速に広がりつつある[1)]。樋口は、人々がそれぞれの地域で育ててきた多様な「景色」[2)]は資産であり、それらを将来に残すような開発を進めるべきだという考えから、持続可能な景色づくりという概念を示した[3)]。地域の多様な景色の資産を適切に育てるためには、まず、地域の歴史的な景観資産の成り立ちや、それらの性質を明らかにすることが不可欠であり、その上で、それらの景観資産の価値を損なわず、それをより強めるような、きめ細かな景観計画や開発が求められる。しかし、各地の現状をみる限り、こういった取り組みは未だ不十分であると言わざるを得ない。

本研究は、このような問題意識のもとに、嵯峨野の名所再興に着目する。山並みに囲まれた景勝の地として知られた嵯峨野にあって、歌や物語などの文学作品に表現されたいくつかの名所は、小規模ではあるものの、嵯峨野の良好な景観を維持するために非常に重要な要素となっている。このうち、江戸から明治にかけて、廃絶した後に、再興されたものが目立った。それらのうち、文学作品の描写にあわせて景観がつくられたものが見られた。このとき、文学による表現などによる、様々な景色の意味づけが、名所再興とその景観デザインに大きな影響を与えたと考えられる。現在の嵯峨野の景観が、過去の景色を想起させるような状態で残っているのは、偶然ではなく、それを継承するために人々の多大な努力や工夫があった末の結果であった。

そこで、本研究は、再興された嵯峨野の名所である祇王寺、落柿舎、厭離庵を対象とし、持続可能な景色づくりという視点から、これらの名所再興を評価する。具体的には、①名所における景色の意味づけ（景観資産の形成）、②名所再興の意図とプロセス（景観資産の再生・創造）、について明らかにし、③再興後の名所の景観特性を、場所のイメージとの関連で捉え、再興時のデザインによって固有の景観資産がどのように継承されてきたかを明らかにすることを目的とする。

資料としては、和歌や物語などの文学作品や名所案内記、郷土史誌や行政文書などの文献資料と、古写真や絵画資料を用いた。

本論は、各地域において育まれてきた多様な景観資産を継承するための、持続可能な景観整備の方法 -景観資産の読み方・創り方- について、示唆を与えると考える。

（２）研究の位置づけ

文学作品の記述・表現や絵画などをもとに風景を分析したものには、中村や、西田、樋口の研究がある。中村は、文学や図会等から、集団表象としての近世以前の風景を論じ[4)]、西田は、近代以降の瀬戸内海を対象とし、欧米人らの視線によって、伝統的な風景の見方が近代的なものへ変容していく過程を論じた[5)]。樋口は、明治以降の文学作品の分析から、郊外の風景を見る見方・風景観の変容を論じた[6)]。これらの研究は、文学や絵画などを媒介にして風景の「見方[7)]」が共有されること、共有された風景の見方が、後世の人々の風景の見方を規定すること、それが全く変化しうることを示した。文献における風景の記述は、主観的であったり、部分的であったりするが、記述の慎重な分析は、風景の見方を論じる上で一つの有効な方法であると考えられる[8)]。

この共有された風景の見方は、現実の風景に対しても影響を及ぼす力をもちうる[9)]。本論では、風景の見方が、現実の環境の保全や改変・整備に与える影響に着目し、具体的な事例調査を通じて考察している。関連する研究としては、近世の人々による名所の景観保全の取り組みを、豊富な史料から明らかにした長谷川の[10)]研究があるが、風景の見方が実際の景観に与える影響について詳細

Key Words:景観、空間設計
*学生員、工修、京都大学大学院工学研究科　博士課程
（京都府京都市西京区京都大学桂4 C1-1,TEL075-383-3329,
Email: Keita.Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）
**正員、博士(工)、京都大学大学院工学研究科　助手
（同住所, 075-383-3328,demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）
***正員、博士(工)、京都大学大学院工学研究科　助教授
（同住所, 075-383-3327,kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）
****正員、博士(工)、広島工業大学環境学部地域環境学科　教授
（広島市佐伯区三宅2-1-1, t.higuchi.wm@it-hiroshima.ac.jp）

表−1　嵯峨野における名所の存続・廃絶と再興

名所の名前	1771	1895−1918	1932
広沢(池)	○	○	○
千代の古道	○	○	○
遍照寺	●	●→◎	○
登天松	○	○	●
児の社	○	○	○
釣殿橋	○	●	●
大沢池	○	○	○
庭湖石	○	○	○
天神宮	○	○	○
五所明神社	○	○	○
小淵	○		●
名古曽の滝	○	○	→◎
大覚寺	○	○	○
直指庵	○	●→◎	●→◎
菖蒲谷	○	○	○
観空寺	●		●→◎
清涼寺	○	○	○
法泉院	○		●
地蔵院	○		●
歓喜院	○		●
竹林院	○		●
療病院	○	○	○
生六道	○	○→●	●
仙翁寺	○or●	○→●	●
小楠公首塚		●→◎	○
宝筐院		●	●→◎
定家　時雨亭	●	●→◎	○
為家の塔	○	○	○
裏柳の社	○		●
妓王寺	○	●→◎	○
三宝寺	○	●	●→◎
新田義貞首塚		●→◎	○

	1771	1895−1918	1932
諍息院	○	○→●	●
福田寺	○	○→●	●
愛宕神社	○	○	○
鎌倉山月輪寺	○	○	○
化野念仏寺	●→◎		○
白雲寺		○→●	●
二尊院	○	○	○
時雨亭旧跡		○	○
長明神社	○		●
車僧塚	○		●
日の宮	○		●
常寂寺	○	○	○
定家の社	○		○
落柿舎	○or●	●→◎	○
壇林寺	●	●	●→◎
野宮	○	○	○
天龍寺	○	○	○
臨川寺	○	○	○
三會院	○		○
鹿王院	○	○	○
曇華院		●→◎	○
斎宮	○		○
小督塚	○	○	○
千鳥ヶ淵	○	○	○
渡月橋	○	○	○
櫟谷宗像神社	○		○
戸難瀬の滝	○	○	●
坐禅石	○		○
古城跡	○		○
大悲閣	○		→○
法輪寺	○	○	○
小督の塔	○	○	○

○ 存在が確認できる，● 廃絶が確認できる
◎ 再興が確認できる，無記入：不明

な事例分析により明らかにした研究はあまりみられない。

嵯峨野の景観の歴史的変遷について論じた研究に土屋[11]や山崎[12]の研究があり、これらは嵯峨野の風景を文学の表現を通して論じており参考になるが、名所の再興については述べられていない。また、これらは、持続可能な景色づくりという視点からのものではない。

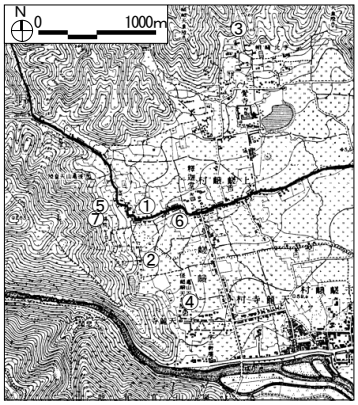
2．　嵯峨野の名所の形成と変遷

名所再興の背景として、嵯峨野の場所の性格を明らかにしなければならない。嵯峨野は、平安時代には貴族の別業の地として、中世には西行や定家ら歌人の山荘の地としてさかえ、その後、念仏信仰、禅宗の一大中心地となった。平安時代から古典文学の舞台としてしばしば登場し、その景色は和歌や漢詩、『源氏物語』や『平家物語』などに表現された。文学のなかで発見された嵯峨野の景色は、後世の人々の間で共有され、やがて嵯峨野のイメージとして定着した[13]。近世になると、多くの参詣客・遊覧客が訪れる名高い名所が形成されていた。

近世までは多くの人々が訪れた名所も、明治以降、寺運の衰退や明治新政府の廃仏策によって大きな打撃を受け、中には廃絶したものも多かった。そこで、江戸時代から昭和初期にかけての嵯峨野の名所の存続を調べた

表−2　嵯峨野における名所の再興事例

	名所	歴史	再興時期	再興の主体
①	厭離庵	定家の山荘・時雨亭の遺跡	1736 年 1901 年	冷泉家(定家の後裔) 大村彦太郎(白木屋創業者)
②	落柿舎	向井去来の別荘、松尾芭蕉『嵯峨日記』の旧跡	1770 年 1885 年 1936 年	井上重厚、蝶夢(芭門俳人) 小松喜平治(素封家)、 永井瓢齋(新聞記者)ら
③	直指庵	黄檗宗の大寺	1860 年頃 1899 年	村岡局(近衛家の老女) 北嵯峨の有志ら
④	野宮	斎宮の潔斎の地、『源氏物語』「賢木」の遺跡	1870 年頃 1873 年	吉見資鎮(村民)が私費で管理 村舎となる 京都保勝会が修復
⑤	祇王寺	『平家物語』「祇王」の旧跡	1895 年	嵯峨の有志ら、 北垣国道(元京都府知事)、祇王村民
⑥	宝筐院	楠木正行の旧跡	1916 年	高木龍淵(天龍寺管長)、川崎芳太郎(実業家)
⑦	滝口寺	『平家物語』旧跡	昭和初期	杵屋佐吉(長唄)



明治22(1889)年測図の仮製地形図を基に作成（1:20000）

図−1　再興された嵯峨野の名所の立地

(表−1)。ただし、対象として、主に山州名跡志に記載されていた名所のうち、山や川などの変化要因の少ない自然地形や、大寺院伽藍内の塔頭群は除いた。史料としては地誌である『山城名勝志[14]』(1711)、『山州名跡志[15]』(1771)、『京華要志[16]』(1895)、『旧都巡遊記稿[17]』(1918)、『嵯峨誌[18]』(1932)を用いた。その結果、64の名所のうち、廃絶したものが30あり、そのうち再興されたものが14あった。再興の時期と主体が明らかなものを表−2に整理した。また、再興された名所の立地を図−1に示した。

再興の時期は、名所巡りが盛んになる江戸後期と、名所廃絶の危機が訪れる明治から大正にかけてに集中した。再興の主体としては、嵯峨の住民である有志と、住民でない素封家が目立った。素封家らは名高い遺跡のなくなることを惜しみ、私財を投じて再興の手助けをした。

本論文では、嵯峨野の名所の再興のうち、最も名高く、なおかつ特徴的な景観形成がみられた祇王寺(3章)、落柿舎(4章)、厭離庵(5章)について述べる。

3．祇王寺の再興と景観デザイン

(1)祇王寺における景色の意味づけ

祇王寺は古くは平安期に念仏道場として栄えた往生院内の一院であった。往生院のある化野は二尊院から化野

念仏寺に至る一体を指し、古来葬送の地であった。古語で「あだし」とは、はかない、あてにならないという意味であったが、そこから死者をまつる場のイメージと結びつき、化野は『徒然草』に「鳥辺野の煙」に対する「あだし野の露」と表現されるような人生の無常の象徴となっていた[19]。

『平家物語』(1243)の「祇王」や「小督」、「横笛」は嵯峨野を舞台にしている。祇王(21 歳)が、妹と母と都を出て尼になり、「柴の庵をひきむすび」、「一向専修に念仏して、ひとへに後生をぞ」願うことになるのは、嵯峨の奥なる山里である。ここ「嵯峨の奥なる山里」を、『平家物語』「祇王」は次のように表現している。

「夕日のかげの西の山のはにかくるるを見ても、『日の入り給ふ所は西方浄土にてあんなり。いつかわれらもかしこに生れて、物を思はですぐさむずらん』と、[20]」

日の入り給う西山の麓にある「嵯峨の奥なる山里」は、山を越えれば西方浄土であり、西方浄土に最も近い場所と見られていたのである。嵯峨野を詠った『新古今和歌集』の歌には、嵯峨野を「墓葬地、出家隠棲の地」とみる表現があった[21]が、ここでついに、「西方浄土に最も近い場所」と表現されることになった。

この祇王の物語は広く世に知られ、名所案内記にもたびたび引用された。祇王寺を訪れた山崎闇斎門下の儒者(未詳)は「もえ出るも枯るるもおなじ野辺のくさのみ生ひしけるふるつかとも、あはれもふかうおもひたとる[22]」(1683)と書き、津村淙庵は「彼よみける歌をおもひ出るに哀も一かたならす、かかる所におもひ入けんほともたくひなくおほゆ。[23] 」(1792)と書いたように、祇王寺を訪れる人々は眼前の眺めに、物語のイメージを重ね、仏教的無常感や「あはれ」を味わっていた。こうして祇王寺は「もののあはれ」を感じる場所として人々に認知され、名所となった。また、祇王の物語は度々絵巻の画題となった。林原美術館所蔵の「祇王絵巻」[24](図-2)には山中の小規模な草庵が描かれており、葺き屋根、土壁、木柱などの意匠がみてとれる。

図-2　「祇王絵巻」に描かれた嵯峨野の景観

(2)祇王寺再興の過程とその趣意

往生院内の一院であった祇王寺は数百年の間、浄土宗の尼寺であった。しかし、『京華要誌』(1895)に「世に祇王寺と称す。もと浄土宗の尼寺なりしか、近年大覚寺へ併せ、今は僅かにその遺墟を留むるのみ[25]」と書かれたように、明治維新後は往生院も祇王寺も住持する者もなく廃れており、また本尊や木像も大覚寺に移されていた[26]。これに対して、明治 28(1895)年に祇王寺の再興を図ったのは、嵯峨の有志である井上与一郎・小松喜平治・小林吉明らと、当時の村長・野路井孝治、そして大覚寺門跡大僧正楠玉諦師であった。再興に際して、京都府知事北垣国道は、自らの別荘の一棟を畳建具と共に寄附し、さらに滋賀県野洲郡祇王村の村人たちはかつて祇王が水利の便をはかった恩恵に感じて大いに力を尽くし、その旧跡に「清雅古撲なる草庵[27]」(清らかで上品であり、古びて飾りけのない草庵)を結んだ。そして明治 35(1902)年に大覚寺の末寺として再興された。

祇王寺の再建計画当時の勧財書には、再興の理由が書かれている。それには、「嵯峨一境の名勝となり、四方の人客来り尋ね参詣する者絶ゆる事なし(中略)大覚寺門跡大僧正楠玉諦師、深く古跡の荒廃を悲み、祇王尼の高躅(こうちょく)を永存せん事を謀る爰に年あり、信徒の者追々増加し本寺再建の希望已むべからざるに至る[28]」とあり、祇王寺再建にあたり、宗教上の理由だけでなく、むしろ名勝・古跡としての廃絶を惜しみ、その再興を意図していることが分かる。

(3)場所のイメージと再興後の景観との関わり

祇王寺の再興を持続的な景色づくりという視点でみたとき、景観資産が継承されたかどうか、つまり、再興時のデザインが場所のイメージを損なわなかったどうかを考察しなければならない。

そこで、再興後の祇王寺の景観特性について述べる。祇王寺は、小倉山山腹の傾斜地上に建つ。寺へのアプローチは、左右は木々に囲まれた傾斜 11 度前後の坂道である。山中にある祇王寺の敷地内部で開けているのは、30m 四方程度であり(図-3)、その狭小な敷地の周囲は鬱蒼とした藪に囲まれている。開けた部分にも楓が植樹されており、敷地内部は枝を伸ばした楓の葉に覆われ、昼間でも薄暗い(図-4)。祇王寺では、四方上下を植栽が囲むことで一つの閉鎖空間を形成しており、それが景観の性格を決定づけている。そのなかに、藁葺、木柱、板壁を構成要素とする草庵風の本堂と山門が建っている。

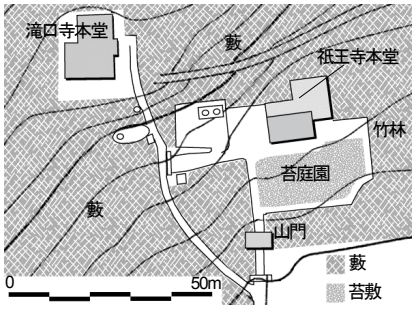


図-3　祇王寺境内の敷地配置　(等高線:2m間隔)

図-4　現在（再興後）の祇王寺の本堂

では、再興後の祇王寺の景観は、人々にとってどのように認識されただろうか。当時書かれた観光案内記である『京都名勝記』(1903)には、再興直後の景観が「境内静寂にして堂門等瀟洒とし、頗る畫巻物中の景に似たり[29]」と書かれており、絵巻に描かれた景観と再興後の景観の類似を指摘している。祇王寺における、場所のイメージと再興後の景観特性を整理したのが**表-3** である。

当時の紀行・随筆をみると、大塚五郎は「今に於てさへ身はあやしくも物語の夢の中に引き入れられるの感があろう」、「かうした物語を心に置いて、祇王寺の門に立つてみれば、今は茫々たる古のあはれさも身に近々と蘇つて[30]」(1939)と書き、高桑義生は「祇王の庵にふさわしい有様であつた。すべてがわたしの想像を裏切らなかつた。[31]」(1947)と書いた。彼らも江戸時代の人々と同様に、眼前の景観に対して物語のイメージを重ねていた。この見方によって、「細い赤松と、藪垣と、雨の降る日などは滅入るやうにわびしい[32]」のように、眼前の環境をわびしい風景として捉えていた。

ここでみられるのは、山中深いアプローチや、敷地内部の地形・植栽による囲繞がつくる景観から、物語の「嵯峨の奥なる山里」のイメージを読みとり、再興された草庵のたたずまいから「山里の柴の庵」のイメージを読みとる、景観体験者の態度である。そして、再興後の祇王寺では、眼前の環境から、意味づけられた景色を読み取ることができていた。再興時には、周辺環境を残しながら、過去の見方をアフォードするような物的環境をつくったという意味で、この景観資産は継承されたといえる。

祇王寺では、敷地内部のみならず、周囲の自然環境が重要な景観構成要素となっているが、この寺の敷地とその周囲の山林はともに、昭和７(1932)年までに風致地区に、その後昭和 41(1966)年に歴史的風土特別保存地区に指定された。これらの指定が、この名所の景観の性格を決定づけている周囲の自然環境の保全に大きな成果をあげた。

表-3　祇王寺の景観特性

形成された場所のイメージ		再興後の景観特性	
景色の表現（史実、文学）	イメージの特性	主な特性	景観構成、景物
墓葬地 和歌 出家隠棲の地	無常の象徴 あだし野（はかない） 憂き世からの逃避先 「嵯峨の奥なる山里」	山中深さ 囲繞性	山中へのアプローチ、 自然景観に囲繞される 地形・植栽による 小規模な閉鎖空間
浄土宗寺院の建立 平家物語・「祇王」	仏教的無常観や 浄土思想の浸透 悲恋、ものわびしい 「山里の柴の庵」	草庵風建築	藁葺, 木柱, 板壁の 本堂と山門

４．落柿舎の再興と景観デザイン

（１）落柿舎における景色の意味づけ

落柿舎は、芭蕉門下十哲の一人に数えられる向井去来が、元禄初年(1688)に自ら命名した別荘である。応仁の乱の頃に寺社は悉く焼失し、一帯を占めていた寺院や宅地の跡地は藪となり畑となっていた嵯峨野[33]に別荘を構えた去来は、『落柿舎の明細書』に「舎の風景」として、「あたご山、乾にみゆ。北山、不残（のこらず）見ゆる、雪おほし。双岡、東山にみゆ。御室、塔見（みゆ）。嵐山。大井川、前村にあり。東南、大竹やぶ。西北、田畠。隣、草堂一宇・農家二[34]」と記しており、落柿舎から四方の山並みや竹藪、田畑などの眺めを楽しんだ様子が読み取れる。

この落柿舎には、松尾芭蕉が元禄四年(1691)四月十八日から五月四日まで滞在し『嵯峨日記』[35]を記した。以降落柿舎は去来と芭蕉の旧跡として広くその名が知られる。『嵯峨日記』によると、この間、芭蕉が嵯峨野の名所に出掛けていったのは二度だけである。滞在二日目に、臨川寺を参詣し、大堰川と嵐山の眺望を楽しみ、『平家物語』で知られる小督の屋敷跡を訪ね、落柿舎を去る二日前には大井川に舟を浮かべ嵐山に沿って戸名瀬を訪れた。嵯峨野には、和歌にしばしば詠み込まれた名所や旧跡すなわち歌枕が数多い。しかし、芭蕉が詠んだ歌枕の景色は、小督の墓と嵐山にとどまった。その他はすべて、落柿舎かその近傍の日常の景色を詠んだ句[36]であり、落柿舎のものさびたたたずまいや、近傍の竹藪、竹の子、麦畑、月などが詠まれている。また、日記には「題落柿舎」として、落柿舎を訪れた凡兆の「豆植る畑も木部屋も名所哉（嵯峨の落柿舎の建っているこのあたりは、豆畑も、薪部屋も、みな由緒ある名所の跡であることよ）[37]」の句を載せている。芭蕉も嵯峨野の平凡な景色を「由緒ある名所の跡」の景色と見ながら、清閑の境地を楽しんでいたのだろう。

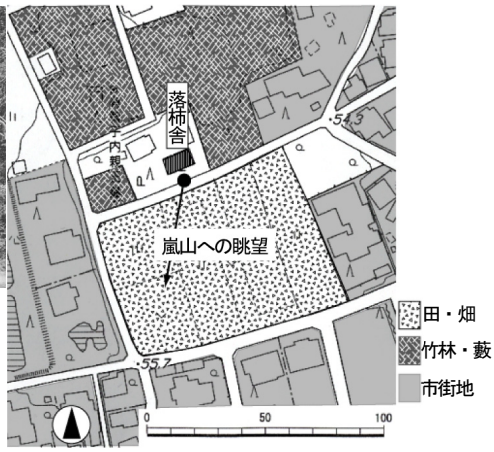
この落柿舎は、去来亡き後には管理する者がおらず、舎は取り壊された。現在ある落柿舎は後人が、元の場所とは異なる、弘源寺の跡地に再興したものである。

（２）落柿舎再興の過程とその趣意

落柿舎が取り壊されて数十年後には、その建っていた場所は、土地の人間にさえも忘れ去られていた。そこで、去来の死後 66 年経った明和七年(1770)に落柿舎の再興を図ったのは、去来の通家であり、その風雅を慕ってい

図-5　落柿舎からみる嵐山の山容

図-6　昭和初期の落柿舎



図―7　現在の落柿舎と周辺環境

た井上重厚であった。重厚は落柿舎の再興について「多くの年月を経て所の人だに其跡をしらずなりにき。さしもこの地に、定家卿の時雨の亭、去来の落柿舎と、風流のすきものにしられたる古跡のかたなくなりけるを嘆く事年久し。[38]」と、その理由を書き記している。再興の際には向井家が所有していた三畳の茶室を譲り受けて移築した[39]。

注目すべきなのが再興時の敷地選定における動機である。以前の落柿舎が立地していた場所を知る人は当時おらず、重厚は落柿舎再興のための敷地の選定にあたって、去来の詠んだ俳句を手がかりにした。重厚の『落柿舎日記』(1774)には、「嵐山にむかひ野々宮に隣て、しかも柿の古木数株今もありて『梢はちかき嵐山』の吟のその景致にまぎるべくもなければ(中略)その世の面影をうつす[40]」とあり、再興時の敷地選定にあたり①落柿舎からの嵐山が眺められる(**図-5**)、②野々宮という名高い名所の近くである、③落柿舎のシンボルである柿の木がある、ことを重要視したことがわかる。

その後、落柿舎は天龍寺の塔頭弘源寺の所有となり捨庵(しゃあん)として使用されるなど、状況は二転三転した[41]。この捨庵も明治 18 年(1885)に弘源寺が売却して取り壊しにかかるとき、偶然素封家であった小松喜平治が通りかかり、この遺跡のなくなることを惜しみ買収したが、まもなく荒廃し、『京都名勝記』(1903)には、「(落柿舎)現今は住人もなく、庭は八重葎(むぐら)いやが上に生茂りて(中略)門は鎖(とざ)さず、家は風雨の吹入るにまかせ、荒涼のさまいと詫し[42]」とあり、管理者がおらず、雑草が生い茂り、舎も荒廃していたことが分かる。その後、昭和 10 年(1935)に小松家が落柿舎を処分することになったのを聞いた永井瓢齋や工藤芝蘭子らが元の持ち主よりこれを買い取り、修復を行った。その際、落柿舎保存会を結成した(現在は財団法人)。その後も、歴代の庵主や保存会の人々の篤志があって現在まで継承されている。

(3)場所のイメージと再興後の景観との関わり

落柿舎の再興を持続的な景色づくりという視点でみたとき、再興によってどのように景観資産が継承されたかどうかを考察する必要がある。

芭蕉はものさびた落柿舎のたたずまいを「中々に作りみがかれたる昔のさまよりも今のあはれなるさまこそ心とどまれ[43]」と評価したが、再興後の落柿舎の藁葺・荒壁の庵や門も、この見方にあうように古風につくられている(**図-6**:『京都名勝写真帖』[44](1939))。

去来らが句に詠んだ落柿舎からの嵐山の眺めは、再興時には、敷地選定の手がかりとなった。現在も、落柿舎からは、仰角 15.2° と視界を大きく占めて嵐山が眺められる。この嵐山の眺望を可能にするのは、舎の南に広がる田畑の存在によってである(**図-7**)。

落柿舎の南には一辺約 65-90m の田畑がある。ここは、小倉山や嵐山の山並みや竹藪、田畑を構成要素とする野の景観が見渡せる、嵯峨野の中でも貴重な場所となっている。落柿舎北の竹藪は、芭蕉が詠んだ句「ほととぎす大竹藪をもる月夜[45]」を思い起こさせる景観要素となっている。落柿舎において、形成された場所のイメージと再興後の景観特性を整理したのが**表-4** である。意味づけられた嵐山の眺望や、周辺の野の環境が一体として持続したことによって、落柿舎は「梢は近きあらし山を見渡しては先哲のあとを慕ひ、大竹藪をもる月夜には、何やらゆかしき聲もすなり[46]」(1897)と評され、去来や芭蕉の詠んだ景色を偲ぶことができた。

この落柿舎周辺の田畑や藪は、昭和 7 (1932)年までに風致地区に指定され、田畑は昭和 41(1966)年に歴史的風土特別保存地区に指定された。これらの指定が、眺望や周囲の領域的な景観の保全に大きな成果を上げ、落柿舎で意味づけられてきた景色は継承されてきた。

表―4　落柿舎の景観特性

形成された場所のイメージ		再興後の景観特性	
景色の表現(史実, 文学)	イメージの特性	主な特性	景観構成、景物
応仁の乱後荒野となる	「由緒ある名所の跡」ものわびた里の景色	眺望	嵐山の眺め(舎前の田畑の存在)
去来の別荘	四方の眺望, 「柿ぬしやこずえは近き嵐山」	野の景観	小倉山の眺め、田畑、背後の竹藪、周囲をめぐる生垣、
嵯峨日記・松尾芭蕉	歌枕以外の嵯峨野の日常の景色、ものさびた草庵	建築	藁葺・荒壁の庵、門

５．時雨亭の再興と景観デザイン

（１）厭離庵における景色の意味づけ

厭離庵は冷泉家の遠祖藤原定家の山荘時雨亭の旧跡として伝えられてきた。定家は主に春になると市井から離れて、自然豊かな嵯峨野の景色を楽しんでいた。例えば承元元年(1207)三月九日には「私カニ嵯峨ニ向フ、庭樹ノ花ヲ見ル為也。樹ヲ栽エテヨリ漸ク長シ、其花ヲ見テ心ヲ養ヒ夕ニ帰ル[47]」とあり、山荘で作庭や花見を楽しんだ様子がわかる。この時雨亭は、小倉百人一首の選定の地として広く世に知られた[48]。

定家が嵯峨野で詠んだ歌として、結びおきし秋のさがのの庵より床は草ばの露になれつつ（拾遺愚草）、小倉山しぐれの頃の朝な朝な昨日はうすき四方の紅葉ば（続古今和歌集）、露霜の小ぐらの里に家居してほさでも袖の朽ちぬべき哉（風雅和歌集）、などがある。これらの歌に表現された草庵の露や霜、時雨は寂しさを示す涙の比喩であると考えられ、嵯峨野・小倉山山麓が寂寥を感じる場所としてイメージされていたことがわかる。小野は、中古の文学作品の分析を通した考察のなかで、王朝人は好んで粗末で鄙びた草屋に出かけ、侘しい環境の中に配置された風月を山里らしい風流な情景として見ており、粗末な田舎風の造りはそうした情景を演出するための背景として評価されていたのではないかとしている[49]。これによると、嵯峨野は王朝人にとって、鄙びた山里という風流な景色を感じるための舞台であり、草庵は趣味的な隠遁生活の場であり、景色の演出要素であったと考えることができる。この鄙びた山里の物寂しいイメージは、歌を通じて、後世の人々の間で広く共有された。

時代が経ち、謡曲「定家」には、嵯峨野の景色が「庭も籬もそれとなく、荒れのみまさる草村の、宿りもかれがれに、ものすごき(ひどく寂しい、寒々しい)夕べなり[50]」と、定家らの表現よりも一層寂しさが強調された。ここでも表現されたのは山里の景色であり、風景の見方は継承された上で強められた。

（２）厭離庵再興の過程とその趣意

江戸初期にはこの山荘は廃れて幾年もの年月が経っていたが、定家・為家の塚は残り、名所となっていた[51]。

この時雨亭の荒廃を惜しみ再興したのは、定家の後裔にあたる冷泉家で、元文元年(1736)の頃に庵を結び、安永元年(1772)より天龍寺派鹿王院の末庵となった。当時書かれた「厭離庵由来書」によると、「いつしか両卿の御しるしの石も苔に埋もれ、軒端の松も生えかはり、庵の名のみ残りたりしが、元文の頃冷泉家の御営ありてより、今はこみちをなす所となれり。かくいちじるしき跡とはいへど、五百とせの星霜を経ぬれば、わづかに残れる礎を求め、もとの野辺の草をかりふきて、此庵を結ぶ[52]」とあり、冷泉家の人々が僅かに残っていた建物の土台石を手がかりとして、再興した様子が読み取れる。注目すべきは、『都名所図会』(1780)の厭離庵の項で、「定家卿の山荘あるひは時雨亭と号くる旧跡、ところどころにあり。かの卿の詠歌により、または少しき因になづみて後人これを作ると見えたり[53]」と、後世の人々が定家の詠歌を手がかりに名所づくりを行ったことを指摘している(**図-8**)。

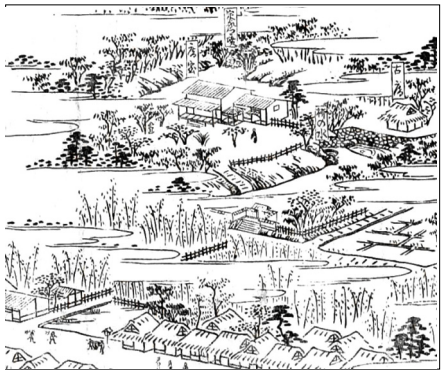


図-８　都名所図会(1780)に描かれた厭離庵（一部抜粋）

冷泉家による再興の後、年月を経て、荒廃する厭離庵の維持管理は難しい状況であった。京都府葛野郡行政文書である『寺院調書』(1895)には、厭離庵が「庵室もむかしのおもかけたになくかたふく[54]」状態にあり、いかなる手を尽くしても維持が出来ないとして、明治20(1887)年１月に大覚寺へ合併することを願い出たこと、そして京都府は古来名高い名所であるということでその願いを一度却下したが、永続の見込みがないために再願の末に大覚寺に属することとなった由来が書かれている。その後も庵は荒廃を続け、周囲の人々は再興を願いながらも進捗せずに年月が流れていた[55]が、ついに白木屋・大村彦太郎氏が資金を投じて、明治 34 年(1901)に仏堂・庫裏を再建、厭離庵を再興し、「京都大村氏の特志により獨力を以て幽雅なる庫裡佛堂の再建を見たるは目出度し[56]」(1910)と評された（**図-9** ）。その後大正 12 年(1923)に茶室・時雨亭が新たに作られ、また本堂も改築された。

江戸時代の後期には、定家の旧跡として時雨亭が作られたのは厭離庵のみでなく、二尊院と常寂光寺の背後の小倉山山腹にもそれぞれ時雨亭が作られていた。二尊院の時雨亭は、「上への山にしぐれのちんあり、見おろしよし[57]」(1816)、「時雨の亭とて、あやしの四阿屋を置く(中略)嵯峨野一円を眺望に備ふ[58]」（1838)とあるように俯瞰景を楽しむ名所となっていた。常寂光寺の時雨亭については、寺の北の古井戸にあった社（歌仙祠）が山上に移されたという記述があり[59]、優れた俯瞰景が得られる場所に名所を作為的に作った可能性がある。しかし、これらの２つは既に廃絶し、現在は残存しない。

図-９　再興当時の厭離庵
(1901-23年頃，厭離庵所蔵)

図-10　厭離庵の露地（現在）

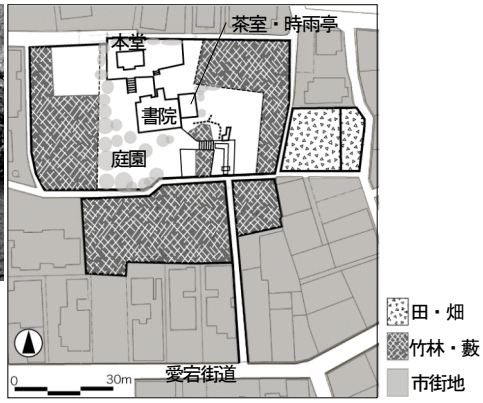


図-11　現在の厭離庵と周辺環境

（３）場所のイメージと再興後の景観との関わり

厭離庵の再興によって、どのように景観資産が継承されたかを考察する。厭離庵は、愛宕街道から北に入る細い竹林の道の奥にある。**図-8** と**図-11** を比較すると、このアプローチとなる竹林の細道と、厭離庵の敷地構成には、江戸後期の再興以降、現在まで大きな変化は見られない。再興後には、数寄屋風の藁葺の待庵と、藁葺の茶室・時雨亭が設けられ、さらに敷地北西の小高い平場に本堂が建設された。山門から書院にかけては、石畳の露地と槇の生け垣が続き（**図-10** ）、書院と苔の庭は地形と植栽によって囲繞されている。この庭には楓樹が多く、厭離庵は紅葉の名所となっている。これらは狭い敷地の中で地形の高低差を巧みに活かしてつくられている。

厭離庵において、形成された場所のイメージと再興後の景観特性を整理したのが**表-5** である。この周辺は昭和７年に風致地区に（現在は風致地区第二種）指定されたが、周辺の宅地化は進み、自然環境が残るのは境内の敷地とアプローチの両脇のみである（**図-11** ）。しかし、周囲の市街地を地形の段差や植栽によって隠すことで、また、残された竹林の道によって、山里へ入るという心理的な演出がなされていることによって、山里の草庵といった景趣を有している。

以上のように、既存の環境を活かしながら、数寄屋建築や露地、庭園などをつくることによって、山里のたたずまいを創造的に継承し、藤原定家と定家が詠んだ和歌を偲ぶことのできる物的環境をつくりだした。

表-5　厭離庵の景観特性

形成された場所のイメージ		再興後の景観特性	
景色の表現（史実、文学）	イメージの特性	主な特性	景観構成、景物
和歌 定家「明月記」 百人一首選定地 謡曲「定家」	霜、露、紅葉 趣味的な隠遁生活 寂寥、鄙びた山里 物寂しい景色	山里の たたずまい 草庵風建築	竹林のアプローチ 露地、垣、楓の庭 地形・植栽による囲繞 数寄屋風建築

６．結論　-嵯峨野の事例から学ばれること-

本論は、嵯峨野の名高い名所旧跡である祇王寺、落柿舎、厭離庵の再興を、持続可能な景色づくりという視点で評価してきた。名所の再興においては、場所のイメージや文学作品の表現が、実際の景観デザインの手がかりとなっていたことが明らかになった。この背景には、文学作品や名所案内記を通して、意味づけられた景色が、人々の間で広く共有されていたことがあった。再興の担い手たちは、出来る限り過去の景色を読み取ろうとし、それをつくり出そうと試みた。その結果、前近代の景色は、場所の記憶としてのみ残るのではなく、現代においても実際に体験することのできる環境として継承されたのである。こういった意味で、嵯峨野の名所再興は、持続可能な景色づくりの一つの成功事例と位置づけることができる。

本論での議論は、人々の間で共有された景色の見方が、現実の環境の保全や改変・整備の際の手がかりになり得る可能性を示唆している。そして、これは、持続可能な景色づくりの有効なアプローチの一つとなると考えられる。つまり、持続可能な景色づくりを進めるためには、新たな開発を行う際に、これまでに育てられてきた景色の見方で、開発後の物的環境を眺められるかどうかを適切に評価する必要があるだろう。また、失われた景色を復元・再生する際には、その場所で育てられてきた景色の見方を発掘し、それを手がかりに物的環境を整備することが、一つの有効なアプローチであると考えられる。本論で扱ったような景観づくりの事例は、今後各地域において、持続可能な地域固有の景色づくりを考える際に大いに参考になるのではないだろうか。

参考文献・補注

1) 2004 年には景観緑三法の制定と、文化財保護法の改正があり、新たに「文化的景観」が保護対象となった。
2) 「景色」という言葉には、視覚的対象の様子のみならず、対象を眺めて起こる主体の感情が含まれた。本論では、主体の感じ取り方を含めた景色という現象を扱う。また、言語の歴史的背景を考え、近代以降の「風景」に対し、近世以前の「景色」を用いる。
3) 樋口忠彦：京都の景色創生，都市研究・京都 vol. 17, p11-21, 2004.
4) 中村良夫：風景学入門，主に二章，中央公論社，1982
5) 西田正憲：瀬戸内海の近代的風景の発見と定着 - 風景観の変遷過程に関する研究-，京都大学学位論文，1996
6) 樋口忠彦：郊外の風景 江戸から東京へ，教育出版，2000

7) オギュスタン・ベルクは「風景には目に見える環境が不可欠の要素であるとしても、風景とは同じく必然的に一つの物の見方なのである」と述べている。本論は、このベルクの考えに賛同した上で、風景の「見方」を、「人間がそれぞれの価値観に基づいて、ある物的環境から風景として情報を抽出するその仕方」とする。オギュスタンベルク著, 三宅京子訳：風土としての地球, p80, 筑摩書房 1994
8) この点については、西田正憲も指摘している。
9) 風景の見方が、現実の環境を保護・保全したり、改変整備したりする可能性については、中村、樋口、ベルクをはじめ、多くの専門家が度々指摘している。
10 ）長谷川成一：失われた景観 −名所が語る江戸時代−, 吉川弘文館, 1996.
11 ） 土屋敦夫：嵯峨野の歴史的風土と町なみの形成, 文学に表現された嵯峨野, 嵯峨野鳥居本町なみ調査報告 , 京都市都市計画局風致課編, 1976.
12 ）山崎正史：京の都市意匠 － 景観形成の伝統−, プロセスアーキテクチュア, 1994.
13 ）前掲 嵯峨野の歴史的風土と町なみの形成.
14 ）山城名勝志, 1711, 野間光辰編：新修京都叢書 vol. 13−14, 臨川書店, 1994.
15 ）山州名跡志, 1771, 野間光辰編：新修京都叢書 vol. 15−16, 臨川書店, 1994−1995.
16 ）京都市編纂部編：京華要志, 京都市参事會, 1895.
17 ） 旧都巡遊記稿, 1918, 新撰京都叢書刊行会編著：新撰京都叢書 vol. 4, 臨川書店, 1985.
18 ）堀永休編：嵯峨誌, 嵯峨自治會, 1932.
19 ）京都地名研究会編：京都の地名検証, p8, 勉誠出版, 2005.
20 ） 市古貞次校注・訳：平家物語　祇王, 日本古典文学全集 29, p63, 小学館, 1973.
21 ）前掲　嵯峨野鳥居本町なみ調査報告, 1976.
22 ） 千種日記, 1683, 駒敏郎, 村井康彦, 森谷尅久編：史料京都見聞記 1 , p104−179, 法藏館, 1991.
23 ） 思出草, 1792, 駒敏郎, 村井康彦, 森谷尅久編：史料京都見聞記 2 , p297−391, 法藏館, 1991.
24 ）小松茂美編：平家物語絵巻　第１巻, 中央公論社, 1990.
25 ）前掲　京華要志.
26 ）嵯峨教育振興会編：嵯峨誌平成版, 嵯峨教育振興会, p116, 1998.
27 ）堀永休編：嵯峨誌, p133, 臨川書店, 1974.
28 ）祇王寺再建計画の勧財書, 前掲 嵯峨誌, p133.
29 ）京都市参事会著：京都名勝記, p186, 五車樓書店, 1903.
30 ）大塚五郎：嵯峨野の表情, p59, 京阪電氣鐵道, 1939.
31 ）高桑義生：洛西景観, p186, 高桐書院, 1947.
32 ）北尾鐐之助：新京都散歩, p74, 創元社, 1940.
33 ） 京都市編：史料京都の歴史　右京区編 14 巻, p439, 平凡社, 1979.
34 ）向井去来ら著, 落柿舎保存会編：去来先生全集, p167, 1982.
35 ） 松尾芭蕉著, 井本農一・久富哲雄校注・訳：嵯峨日記, 新編日本古典文学全集 松尾芭蕉集 2, p154, 小学館, 1997.
36 ） 芭蕉が嵯峨日記のなかで詠んだ俳句には, 柚の花や昔しのばん料理の間, ほととぎす大竹藪をもる月夜, 手をうてば木魂に明くる夏の月, 竹の子や稚き時の絵のすさみ, 一日一日麦赤らみて啼く雲雀, 能なしの寝たし我をぎやうぎやうし, 五月雨や色帋へぎたる壁の跡, などがある.
37 ）前掲　嵯峨日記, 松尾芭蕉集 2.
38 ）井上重厚：落柿舎日記, 前掲　去來先生全集, p535.
39 ） 西馬門人三浦若海：落柿舎去来先生事実, 前掲 去來先生全集, p605.
40 ）前掲　落柿舎日記, 前掲　去來先生全集, p535.
41 ）前掲　嵯峨誌 平成版, p160.
42 ）前掲　京都名勝記, p186.
43 ）前掲　嵯峨日記.
44 ） 京都市産業部観光課：京都名勝写真帖, 京都市産業部観光課, 1939.
45 ）前掲　嵯峨日記.
46 ）雙湖菴桂陰：嵯峨名勝案内圖會, p17, 小林吉明, 1897.
47 ） 藤原定家：明月記, 今川文雄訳：訓読明月記２巻, 河出書房新社, 1977.
48 ）前掲　嵯峨誌 平成版 , p103.
49 ） 小野恭平：中古の文学作品から見た山里の興趣について, 日本建築学会計画系論文報告集 404, p111−120, 1989.
50 ） 伊藤正義校注：定家, 新潮日本古典集成　謡曲集, 新潮社, 1986.
51 ） 黒川道祐：近畿歴覧記, 嵯峨行程, 1680, 前掲　史料京都見聞記 1 , p52.
52 ）厭離庵由来書, 前掲　嵯峨誌, p114.
53 ） 秋里籬島：都名所図会, 1780, 竹村俊則校訂：新版都名所図会, 角川書店, p403, 1999.
54 ）京都府社寺課：寺院調書, 京都府立総合資料館蔵, 1895.
55 ）不明：厭離庵本堂再建の疏, 厭離庵所蔵, 年代不明.
56 ）雙湖菴桂陰：嵯峨名勝, p30, 1910.
57 ） 未詳：旅日記, 1816, 駒敏郎, 村井康彦, 森谷尅久編：史料京都見聞記３, p25−42, 法藏館, 1991.
58 ）未詳：十国巡覧記, 1838, 前掲　史料京都見聞記３, p157.
59 ） 前掲　近畿歴覧記, 嵯峨行程, 1680, 前掲 史料京都見聞記 1 , p52.

嵯峨野の名所再興にみる景観資産の創造と継承に関する研究
−祇王寺、落柿舎、厭離庵の再興事例を通して−

山口敬太・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦

本論は、嵯峨野の名所旧跡である祇王寺、落柿舎、厭離庵の再興を、持続可能な景色づくりという視点から評価するものである。具体的には、名所とその周囲での景色の意味づけの歴史的過程を追い、各景観資産の成り立ちとその性質を把握した上で、名所の再興された経緯と目的を明らかにした。そして、場所のイメージと再興後の景観特性の関わりを考察した。その結果、名所再興においては、場所のイメージや文学作品の表現が、実際の景観デザインの手がかりとなり、景観資産の継承に大きな影響を与えたことが明らかになった。本論は、地域の持続可能な景観整備の方法 −景観資産の読み方・創り方−について、示唆を与えると考える。

Creation and Succession of the Landscape Asset through Reconstruction of Meisho in Sagano

By Keita YAMAGUCHI・Yoshifumi DEMURA・Masashi KAWASAKI・Tadahiko HIGUCHI

This paper discusses how the landscape assets could have been durable in the reconstruction of Meisho -Scenic Beauty- such as Giouji, Rakushisha, Enrian, in Sagano, Kyoto. The landscape characteristics of such scenic beauty is made by literary works, poetry, etc.. And their images played an important role to reconstruct the Meisho and to inherit their historical landscape assets.